

八代集の掛詞 一部立との関連において— 松崎安子

本発表は八代集における掛詞について、『日本語歴史コーパス 和歌集編』の掛詞情報を活用し、数量的、形態的な特徴を各和歌集の部立と関連づけ述べるものである。

課題 1 八代集が擁する 155 の部立における掛詞の割合を求め、その大小から部立の特徴を見出す。

課題 1 の結果 各部立の全掛詞数÷各部立の全収録歌の短単位数×1,000 の式で千分率として求めた。その結果、降順の上位を金葉集「連歌」、拾遺集・千載集・古今集の「物名」が占め、その他、古今集・後撰集・千載集の「誹諧歌」も上位にまとまって見られる。また、上位半数の 1~78 位に「恋」を含む部立が 23 見られ、一方、春夏秋冬を含む季節の部立は下位 79~155 位中に 37 と多かった。

課題 2 八代集の掛詞情報を言語単位で観察することで部立毎の特徴を見出す。

課題 2 の結果 掛詞がどのような主本文に当てられているのかを短単位レベルでみると 3 パタンある。そのパタンの割合の大小と部立を関連づければ次のようになる。

- ①主本文と掛詞が同音数で「1 短単位:1 短単位」のパタンの割合が大きいのは、季節の部立と拾遺集以降の「賀」の部立である。一方、「恋」の部立は小さい傾向にある。
- ②主本文の短単位の一部を掛詞に利用するパタンの割合が大きいのは、恋の部立と最初期の勅撰集の「賀」の部立である。一方、季節の部立は小さい傾向にある。
- ③本文の短単位の複数にまたがった（結合された）ところに掛詞が当てられている割合が大きいのは「物名」、「誹諧歌」の部立で、他の部立での割合は軒並み小さい。